様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ６ 月 ２３ 日現在

機関番号：５７１０３
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2012～2015
課題番号：２４５２００４７

研究課題名（和文）来華イエズス会士がもたらしたもの－『天学初函』に見る異文化概念の理解と齟齬－

研究課題名（英文）The Jesuit who coming China brought things - Understanding and inconsistency of the cross-cultural concept seen in the "Tian xue chu han" .

研究代表者
安部　力（ABE, Tsutomu）

北九州工業高等専門学校・生産デザイン工学科・教授

研究者番号：６０４３５４７７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,100,000円

研究成果の概要（和文）：　本件は、16世紀末に東アジアへ到来したイエズス会士の活動に始まる、キリスト教思想の影響について考察したものである。特に、その活動過程の一つの精華である『天学初函』を中心に、そこに見られる「（西洋的）キリスト教概念」がどのように紹介され、また理解・受容されていったのかについて分析を行った。結論としては、その「理解」には限界が見られ、その原因として「文化的基底を為す世界観の相違」を析出した。
　また、以上のような「歴史性」を踏まえると同時に、彼らの活動がどのような「現代性」を持っているのかについても現地調査を通して把握を目指した。結果としては、特に台湾に於いて「地域性を背景に持つ習合」が見られた。

研究成果の概要（英文）：　This matter considered influence of the Christianity thought which began with the activities of the Jesuit who was arriving to East Asia in the late 16th century. Particularly, I analyzed mainly on “Tian xue chu han(天学初函)” which is one of the essence of their activity process, and seen in there “(Western) Christianity concept” was how introduced and received or understood. In conclusion, is in its “understanding” limit is observed, it was caused“differences of view of the world that forms the cultural base”.
　In addition, I aimed at the grasp through a field work at the same time to stand on these“historicalness” what kind of “modernity” their activity had. As a result, the“syncretism with the background of regional characteristics” was seen especially at Taiwan.

研究分野：中国哲学

キーワード：キリスト教思想　イエズス会士　天学初函

１．研究開始当初の背景

本件に関連する研究開始当初の研究状況は、以下のように、「個別地域的」「断代史的」な専門研究が成果として積み上げられていた。特にカトリック・キリスト教の修道会である、イエズス会宣教師の活動に関する研究を取り上げれば、以下の通りである。

(1)中国に於けるイエズス会の活動については、マテオ・リッチをはじめとするイエズス会士が明朝末期に来華し、清朝中期に国外退去させられるまでが主に研究対象となっていた。例えば、佐伯好郎氏、矢沢利彦氏、後藤基巳氏、柴田篤氏、葛谷登氏、安大玉氏等がその代表例である。

(2)日本に於けるイエズス会の活動については、所謂「キリシタン研究」として、フランシスコ・ザビエルが来日する前後の活動からキリシタン禁制に至る時期までを、更には「カクレキリシタン」の信仰形態の変化等をも対象としていた。それらについては、例えば海老沢有道氏、清水紘一氏、五野井隆史氏、岸野久氏や宮崎賢太郎氏をはじめとする多くの研究者が注目し明らかにしている。また、キリシタン禁制以後の江戸期に、中国を経由して日本に伝来した「西洋学術」についても「洋学研究」として取り上げられていたが、それらについては、大庭脩氏や松浦章氏の研究があげられ、この他、幕末から明治にかけては「洋学」として扱われていたことに関連して、鮎沢信太郎氏や杉本つとむ氏などの研究がある。

(3)上記以外にも「17 世紀朝鮮朝」における研究もあげられるが、その代表的な例は姜在彦氏や山内宏一氏、車基真氏、鈴木信昭氏等の研究が挙げられる。

以上のような各地域の研究成果は豊富であるが、それらがどのような「共通認識」の下に置かれていた（支えられていた）のか、「キリスト教」という西洋文化に対する各地域各時代の反応が、どのような俯瞰的（比較）視点から捉えられるのか、という視点（意識）は希薄であったように映っていた。

以上のような状況であったため、本件担当者が念頭に置いていた、16 世紀末に東アジアへ到来したイエズス会士の活動に於いては、具体的な影響がどのように各地域で見られ、それらがどのように相互に関連していたのかについて、その全体像が把握しづらかった。それは、イエズス会の東アジア地域での布教方針を統括管理していたアレッサンドロ・バリニャーノの存在を考慮すれば、本来必要な視点であったはずであると考えたことが、本件の発想における端緒であった。

以上が研究開始当初の学術的背景である。

２．研究の目的

１の背景を踏まえ、本件では、従来のような「個別地域的」「断代史的」視点では把握しづらい対象に対して、「地域俯瞰的」「通時的」視点の獲得（措定）を念頭に置き、研究を進めることを目的とした。

その際、まずは基礎作業として、実際の布教活動に於いてどのような布教方針が示され、またそれにどのような反応があったのかについての分析を進めた。そのため、アレッサンドロ・バリニャーノの布教方針を実際の布教活動に反映させた人物であり（教え子・弟子でもある）、中国でのイエズス会の活動に大きな足跡を残したマテオ・リッチを取り上げることとした。特に、その活動過程の一つの精華である『天学初函』を中心に、そこに見られる「（西洋的）キリスト教概念」がどのように紹介され、また理解・受容されていったのかについて、まずは分析を行うこととした。それは『天学初函』にはリッチ（利瑪竇）の著作が多く収載され、そこには「イエズス会」の布教方針（原則）が示されていると考えたからである。

また、16 世紀に東アジアで活動を始めたイエズス会は、18 世紀には活動の停止を余儀なくされるが、その大きな要因の一つに「典礼問題」があった。この問題の発端はリッチ（同時にバリニャーノ）の布教方針の中に既に胚胎しており、そこに見える問題は現代の東アジア地域でも、キリスト教が直面する問題として捉えることが出来る。

このように、16 世紀に東アジアで開始されたイエズス会の活動が及ぼした影響、そして 18 世紀に活動の中止を余儀なくされた原因、更には現代の東アジアにおいて展開するキリスト教が直面する問題を一つの連なりとして捉え、そこから見えてくる東アジア各地域の共通性と差異性を明示することが、本件の一つの目的であり、同時に、今後の東アジアに於いてキリスト教のような「西洋的価値観」がどのように浸透・受容・変容・排斥されるのか、その可能性について見据えていくこともテーマとした。

３．研究の方法

以上のように、本件が研究・分析対象とする範囲は地域的にも時代的にも広範にわたるため、焦点を当てるべき対象と研究方法を以下の二つに絞っている。

一つは、前述の通り、思想面での文献資料である『天学初函』を取り上げ、まずはそこにみられる「キリスト教的概念」の分析を行い、特徴を抽出することを念頭に置いた。

ここには、「発端（胚胎原因）」としての布教方針が示されているが、同時にイエズス会士が持ち込んだ（当時持っていた）「世界観（宇宙像）」が示されており、その「世界観」がどのような影響を与えたのかについて考察を行った。

また、もう一つの研究方法として、本件の特徴でもある、「現代」までもが検討材料（考察対象）であるため、文献学的アプローチだけではなく、現地調査という「文化人類学的手法」を取り入れることとした。それは、「文献学的アプローチ」ではこぼれてしまう事象、

また「歴史的事象」がどのように「現代」に連なっているのかまたは断絶しているのか、その様相を正しく把握したかったという理由による。結果としては当初意図していた中国大陸、韓国などでの調査は行えなかったが、様々な機会を捉えて行った台湾での現地調査では、様々な知見を得ることが出来、それらは随時、研究成果として報告することが出来た。

このように、「歴史上の事実」を文献学的アプローチで把握し、そこで得た知見を元に、「現地調査」という文化人類学的アプローチによって文化・思想の実相を明確にするという方法は、本件のテーマである「西洋文化と東アジア文化」の出会い・衝突、そして文化の相互変容の現状を明確にする「両輪的」手法として、非常に有効であったと考えている。

４．研究成果

如上の目的と、その目的達成に適した手法の採用によって、以下の成果を得ることが出来た。

まず、「文献学的アプローチ」によって、リッチの主著が多く収められている『天学初函』は、当時のイエズス会士が伝えた「世界観」を示すものであり、それらを「科学的知識」（当時にあっては「デザイン論証」）を用いた証明であったが、それらは「必ずしも正確にその意図を理解されなかったであろう」ことを指摘した。それは、特に「職方外紀」という書籍が、「地理書」にカテゴライズされるという当時の意識（取り扱い）から読み取ることが出来た。つまり、当時の中国に於いて、イエズス会の持ち込んだ「世界観」つまり「アリストテレス的宇宙像」を示す一つの資料である「職方外紀」が、中国側資料ではそう受け止められておらず、単なる「地理情報誌」としか認識されていなかったことから明らかにした。この点については、現代まで連なっている意識であろう事も指摘した。ただし、この過程で本来明示するはずであった「リッチの布教方針（利瑪竇的規矩）」については時間的制約もあり、詳細な分析を今後の課題として残すこととなった。一方で、その「世界観」と共に、バリニャーノが示していた「現地適応方針（利瑪竇的規矩の一端）」については、台湾での現地調査に於いてその「現代的展開」を見ることが出来た。

特に、「媽祖」と「聖母マリア」との「習合（親和性・近似性）」については、台湾の各キリスト教教会（天主堂）に於いて見られ、その背後に若桑みどり氏の言う「大地母神的信仰」がある可能性についても言及でき、これらはキリシタン禁制以後の「マリア観音」とも通底する事象として、今後の展開を見据えられる課題となった。

以上のように、資料的アプローチと現地調査的アプローチにより、通時的且つ地域横断的なアプローチの手法を確立できたと考えている。これらの手法は今後更に発展させ、洗練出来るものであるとも考えている。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１０件）

①<u>安部力</u>「台湾におけるカトリック・キリスト教信者の宗教意識に関する一考察（五）－建築様式及び装飾備品を中心に（Ⅰ）－」（『北九州工業高等専門学校研究報告』第４９号、95～104 頁、2016 年１月。単著。査読有り。）

②<u>安部力</u>「台湾におけるカトリック・キリスト教信者の宗教意識に関する一考察（四）－「図・像」を中心として（Ⅰ）－」（『北九州工業高等専門学校研究報告』第４８号、137～146 頁、2015 年１月。単著。査読有り。）

③<u>安部力</u>（他６名：宋明思想研討会（本件の「宋明思想研討会」のメンバーは安部力以外に、荒木龍太郎（代表）、鶴成久章、楢崎洋一郎、伊香賀隆、森宗圭、野口善敬。））鄧豁渠『南詢録』訳注（九）（『活水日文』現代日本文化学会編、第 56 号、23～51 頁、2014 年 12 月。共著、主な担当部分は 24～35 頁。）

④<u>安部力</u>（他６名：宋明思想研討会）鄧豁渠『南詢録』訳注（八）（『活水論文集』、第 57 集、31～51 頁、2014 年３月。共著、主な担当部分は 35～37 頁。）

⑤<u>安部力</u>（他６名：宋明思想研討会）鄧豁渠『南詢録』訳注（七）（『北九州工業高等専門学校研究報告』第４７号 105～114 頁、2014 年１月。共著、主な担当部分は 108～109 頁、113～114 頁。）

⑥<u>安部力</u>（他６名：宋明思想研討会）鄧豁渠『南詢録』訳注（六）『活水日文』現代日本文化学会編、第 55 号、17～45 頁、2013 年３月。主な担当部分は 25 頁、41～43 頁。）

⑦<u>安部力</u>（他６名：宋明思想研討会）鄧豁渠『南詢録』訳注（五）（『活水日文』現代日本文化学会編、第 55 号、１～32 頁、2012 年 12 月。共著、主な担当部分は 7～8、17～20、28～32 頁。）

⑧<u>安部力</u>（他６名：宋明思想研討会）鄧豁渠『南詢録』訳注（四）（『活水日文』現代日本文化学会編、第 54 号、１5～42 頁、2012 年 3 月。共著、主な担当部分は 27～29、38～40 頁。）

⑨<u>安部力</u>（他６名：宋明思想研討会）鄧豁渠『南詢録』訳注（三）（『活水日文』現代日本文化学会編、第 53 号、１～28 頁、2012 年１月。共著、主な担当部分は 10～12、20、28 頁。）

⑩安部力「台湾におけるカトリック・キリスト教信者の宗教意識に関する一考察（三） －現地調査における現状と課題－」（『北九州工業高等専門学校研究報告』 第４５号、129～138 頁、2012 年１月。単著。査読有。）

〔学会発表〕（計０件）

〔図書〕（計２件）
①安部力「『岩波 世界人名大辞典』（岩波書店、2013 年 12 月。共著（安部力以外には、中純夫、鈴木信昭、早坂俊廣、鶴成久章、他 796 名が担当）、担当部分 pp768～769、1366。）

②安部力「『天学初函』における『職方外紀』の位置が示すこと」（『哲学資源としての中国思想－吉田公平教授退休記念論集－』所収、吉田公平教授退休記念論集刊行会編著、研文出版、2013 年３月。共著（安部他 18 名による）、254～280 頁に収載。）

〔産業財産権〕
○出願状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等
・特になし。

６．研究組織
(1)研究代表者
安部　力（ABE,Tsutomu）
北九州工業高等専門学校
・生産デザイン工学科（一般科目・文系）
・教授
研究者番号：６０４３５４７７

(2)研究分担者：なし。

(3)連携研究者：なし。